

結婚・出産・そして子育て

一度は恋をさせたい

わが家にノイが来た時から、タイミングを待っていたのだ。

あのいたずら小僧？も、もう二歳半、身体も心もすっかり大人に成長した。可能だというだけで、遊び盛りの子に母親役をさせたくなかったし、人間様の方にもじゅうぶん時間にゆとりがある時期が好ましいと考えていたふたりにとって、ちょうど夏休みに出産予定というのは、またとないチャンスであつた。二歳半ということは、人間の歳に置き換えれば二十四・五歳、結婚適齢期である。

「おい、どうする、ノイ子、お婿さんもらうかい？」

「・・・クフン・・・フン。」

そんなわけで、わが家でノイ子の結婚が決定したのは、四月初めのことであつた。

中には、シーズンが来るということ、イコール母親になれることと思ひ込んで、初めてのシーズンから、もう仔犬を産ませようとする人もいるようだが、これは避けた方がよい。せめて、一歳半から二歳になるまでは、どんなに仔犬が欲しくても待つべきだろう。

ノイのシーズンは、正確に年二回、少々太り気味だが、体調はすこぶるいい。もともと、牡

を飼うか牝を飼うかについて考えたときに、犬の世界では、よほど良い牡ならば別だけれど、ありきたりの男前では、お嫁さんに恵まれるチャンスは保証できないし、さりとて、牝牝ペアで飼うのは大変だしで、結局、男と生まれて一度もなにできないっていうのもかわいそう。犬の世界では、女の子がお嫁さんを選ぶ権利を持っているというのが、わが家で牝を飼うことになった理由の一つでもあったから、彼女が女盛りになった今、愛しいお嫁さんを見つけてやらねばなるまい、ということになった。

なにしろ、わが家でお産は、初めての経験である。

犬のお産は軽いというのが、昔からの言い伝えだが、いろいろ調べてみると、現代の都会で、野性を失った飼われ方をしている犬たちのお産は、一概に安産ばかりとは言えないようだ、夏休み中ならば、彼女の面倒もじつくりと見てやれるはずである。

「それでは決定、ノイは今年結婚しまーす。いいか、ノイ子？」

「ワン・・・ワン」

夏のお産について、早速、掛かり付けの獣医さんに相談をかける。

「ああ、ノイちゃんなら大丈夫ですよ。元氣一杯なんだから。」

「どうやら安心そうである。」

急いでお嫁さん捜しを始めなければならない。わが家のノイは、ブラックである。母親もブ

ラック、父親もブラック、母方の祖父母は不明だが、父方の祖父母はブラックだから、彼女がブラックなのは至極当然のことである。同じ黒でもラブラドル・レトリバーの黒は、他の犬種の黒毛とはひと味違って、極めて艶やかで美しい。黒という色の性質から、きりりと引き締まった感じも捨てがたく、愛好者も多い。

ラブラドルの毛色は、黒の他にクリームとチョコレート、三種類の毛色がある。どの色も、またそれぞれに独特の味わいがある。毛色による優劣は付けがたい。どの色も飼ってみたいのが人間の欲望だが、それが果たされなければ、手もとに居ない色の子が欲しくなるものである。

「クリーム色の赤ちゃん、きつと可愛いわよ。」

ということになって、クリーム色のお嬢さん捜しが始まった。クリーム色の因子よりブラックの因子の方が優勢である。「クリーム色の赤ちゃん」を得るためには、よほどクリームの子を強く持ったお嬢さんを見つけなければならない。残念ながら日本には、増えてきたとはいっても、まだ、ラブラドルの数が少なかった。まして、優秀な子種を授けてくれるクリーム色のお嬢さんとなると、なかなか見つからないものである。数が少ない犬種だけに、好いのが居たと思うと、血縁関係があったり、交配に立ち会ってもらっては困るとか、産まれた仔犬の中から、牝を何匹いただききまずとかいった、気の進まない条件付きだったりして、破談にする

こと数件。年頃の娘を持った親の苦勞がわかるような気がしてくる。ラブラドルクラブの仲間・知合いの獣医さん・訓練士さんと、あらゆるところに声をかけるが、なかなか芳しい話は聞こえてこない。たまに聞こえてくる良い男の話は、北海道とか九州とか、遠い地方のものばかりである。

犬の場合は・・・人間の場合も同じかも知れないが・・・男の方がデリケートらしく、結婚する時も、婿さんの方は家から動かさず、嫁さんの方を相手の許に連れて行くのが常識である。中には交配のために、牡の所へ飛行機や汽車を使って、牝を送って事を済ませるむきもあるよ。うだが、わが娘の結婚には、やはりなんとか立ち会ってやりたい。

「どうしようか？ 京都に良い子が居るって話だけど、京都辺りまで位なら、東名高速飛ばしてって、日帰りできないこともないねえ。」

「でも、疲れるわよ、貴方もこの子も。日本にもアメリカみたいに犬を泊めてくれるホテルがあればいいのにね。」

そんな話がわが家で交わされるようになった頃、出入りの訓練士さんが、お見合いの話を持って来てくれた。候補者は「金のわらじで捜せ」と昔から言われる一つ歳下の男の子。色はクリーム色で、名前はマック、甘えん坊だけれど、訓練性能は抜群でJKCの訓練チャンピオン、お家も、わが家から目と鼻の先の歯医者さんだという。とりあえず、将来産まれてくることにな

るであろう子供たちに、母親の持つ諸々の免疫性を伝えてもらうために、獣医さんに来ていただいて、ワクチンの注射をしてもらう。これで一応の準備はOKだ。

ノイのシーズンも近付いていることゆえ、あまりのんびりもしてられない、早速、釣書ならぬ血統書を見せてもらう。どうやら彼は、特に名門のご出身というわけではないようだ。

人間にしろ犬にしろ、名門の出かならずしもすべて優秀とは限らない。庶民出身大いに結構、ちよつと気になる点もあるが、その犬舎の犬がすべて悪いわけでもないはずで、特に劣悪な血統を受け継いでいない限り、問題はその子自身である。面白いことに、同じ犬種であっても、個体差は非常に大きく、すべての面に現れるもので、それは精神面においても例外ではなく、数匹の犬たちが集まれば、必ず気の合う奴と合わない奴が出てくるのは人間社会とそっくりである。犬の社会においても、気に入った相手に対しては極めて親切だが、そうでない場合には、極めてそつけない態度を示すのが常である。これはあるコリー君のオーナーの話だが、交配のために、女の子が泊まりがけでやって来ることが何度かあったそうだが、ある雨の日のこと、そこが自分の家である男の子は、雨に当たらない場所を占拠して、彼女の方は哀れにも、雨の当たる場所に追いやられていたので、犬の世界っていうのは、そういうものかと思っていたところ、たまたま、また、雨の日に来あわせた別の彼女に対しては、彼女に雨の当たらない場所を譲って、自分は雨に濡れて居たそうである。ラブラドルの場合も、気が合わないからといっ

で、喧嘩を始めるようなことはしないけれど、気にいらぬ相手にたいして親切な態度を取らないことは、前記のコリー君の場合同様、事実のようだ。父兄としては心配である。家のノイ子に邪険な態度をみせる彼氏だったら許せない、絶対、婿さんになんかしてやらない。それに、彼氏の体型なども、この目で見ないことには安心できない。

吉日を選んで見合いの席を設ける。案ずるよりは産むが易し、彼氏は、ノイ子に極めて親切だ。たしかに甘えん坊だが、顔つきは穏やかで、なかなかの二枚目である。体型もしっかりしていて、脚も太い。難点を捜せばないこともないが、娘の相手を百パーセント気に入る親もないだろう、他にこれという相手が見あたらない現在、あまりぜいたくばかりを言ってもいられない。父兄としては、目をつぶろう。ノイ子の方も、すっかりその気になったようだ、互いに相手の臭いを、いとおしそうにかぎあっている。ノイは子供るときから、ずっと家の中で成長したせいか、同じように、家の中で暮らしている犬とは、すぐ仲良しになる。それは、女の子に対しても男の子に対しても、変わらないようだ。当事者同士は、どうやら合意点に達しているらしい。

残念なのは、現在の血統書には、歴代の毛色が記されていないので、彼氏がどの程度クリームの因子を持つているのかが、血統書を見ただけでは、まるでわからないことである。懇意の繁殖者から譲り受けた子であれば、数代前に遡って、毛色ばかりでなく、様々なことが聞き出

せるけれど、犬を手に入れるまでに、何人もの仲介者が入ったりした場合には、わからないのが普通である。

一般に、多くの愛犬家たちは、何種の何色の子が欲しいとなったら、どうしてもその子だけに目が向いてしまうのが常である。聞いてもせいぜいその子の親のことぐらいで、血統書で気にするのは、チャンピオンの印が付いたのが何頭含まれているかという程度であろう。愛犬家にとっては、その時は欲しかった対象の、その子だけが問題なのであり、関心のすべてがその子に向かうのは、至極当然のことなのだが、何年かして、さて子供でも産ませようかとなった時には、歴代の祖先たちのことは、もうわからないというケースが多いものである。親切な仲介をしてくれる業者の場合には、それでもなんとか調べてくれるけれど、お互い手間も暇もかかることだから、できるだけのは、仔犬を引き取る時に、調べて記録して置いたほうがいいのだが・・・。

そんなわけで、ノイの婿さん候補の二枚目君も、クリーム色の因子をどれだけ体内に備えておいでなのかわからなかったが、彼の艶やかなクリーム色の毛並と立派なこう丸とに期待して、結婚の儀を執り行うことにした。

鶺鴒セセリに「とつぎの道」を教えられたという神代の昔はいざ知らず、現代の人間の若者たちなら、お床入りのすべなどは、誰に教えられなくとも、世の中に溢れている週刊誌・婦人雑誌・

スポーツ紙の類からすべて先刻ご承知だから、惚れた者同志、二人放って置けば、勝手にそのうち子供ができるけれど、裏ビデオにもポルノチックなご本にも、とんと興味を示さないワンちゃんたちのことゆえ、子供の頃などはじゃれあつて、牝牝かまわず乗つかつて、腰振りダンスに興じていた姿は見知っているものの、それは、性的なものとしてよりも、自分の優位を誇るための仕草という説もあり、牝が牝の上に乗つかつているのなんかを見ると、それも本当みたいな気がするから、お互い同志気に入っている様子だからといって、後は二人でお好きにどうぞというわけにはいかないようである。ワンちゃんたちだつて、何日か一緒においといてもらえるのなら、それこそ、庭に飛来する鶺鴒のお尻の振り方なんか真似しなくたって、自分とちゃんと子供ぐらい作れるだろうけれど、どっこい、飼主の方は愛犬を、そう長くは預かつても預けても居られない。その点、かわいそうだが、いたすことをいたしたら、ハネムーンはなし。効率良くベビーちゃんを、お腹に宿してもらいたいのが人間様のご都合である。

かくて、双方の飼主とベテランの訓練士さんが、介添役を勤めることと相成った。

結婚式の日取りを決めなければならない。聖子ちゃんじゃないけれど、「できてると思つたのにイ・・・」では、都合が悪い。

犬の場合、普通、シーズンは二・三週間ぐらいであるが、その期間ならいつでも妊娠するといふものではない。シーズンがきてから、十二・三目が一番妊娠の可能性が高い日とされている。

る。ノイの場合、十二日目は六月十四日なので、その日の午後と決定。

「待て待てマック！ そんなに慌てるなつてば！ お嫁さんは 逃げやしないよ。」

彼は、どうやら久しぶりの女性を眼前にして、気が焦るらしい。せわしなく腰を振りながら、前進前進また前進をつづけるのだが、どうもうまくまいらない。ノイの方は尻尾を九十度真横に曲げて、受入態勢OKのポーズである。心なしかノイの目はうるんで見える。

この先の描写は、「四畳半襖の下張り」じゃないけれど、発禁処分なんてことになつても困るから、以下省略……。

こういうことにはベテランの、訓練士さんの手を借りて、事は一件無事終了。気疲れしたのも、肉体労働したのも、両方の飼い主の方で、乱れた室内を片付ける飼い主の女医さんを眺めながら、彼も彼女も至極満ち足りたお顔であった。

「まず間違いなく大丈夫ですよ。」

訓練士さんの太鼓判ではあったが、彼と彼女の顔を見ながら「コーヒー」など喫しているうちに、何だか、たった一度だけというのかわいそうという想いが、双方の飼い主に湧いてきて、

「念のためにもう一度、続けてだと男の方も疲れてよくないから、一日置いて、明後日でももう一度逢わせてやりましょう。」

ということに相成った。

ノイは、彼氏がよほど気に入ったようである。家に帰ってからも、窓から夕暮れの空を眺めて、「クウーン」と日頃は発したことの無いような声を出していたのには、こちらの方が切なくなつた。

そんなノイ子であつたから、二度目はお互いもの慣れて、介添役の労も半減した。これで、ご懐妊は間違いないだろう。

出産準備

それからが大変である。妊産婦を抱えると、考えなければならぬことがたくさんある。

早速、ドッグフードを、サイエンスの成犬用から母犬用に変える。現在のドッグフードは完全栄養だとはいうものの、人間の目で見ると、成犬用も母犬用も、どちらも同じコロコロの玉つころで、ちよつと物足りない、妊娠しているからといって、栄養過多による肥満は禁物だが、なにかが不足というのもまた困る、そこで、妊産婦の食事にはいろいろと気を使うことになる。

犬用の粉ミルク、これはどつきり与えても良いようだ。カルシウム剤、やたら用いると麥に骨を硬化させて良くないらしい、それより、煮干のような天然の物の方が、犬も喜ぶし身体にも良い。

運動は、過労にならないように気を付けなければならないが、できるかぎり普通どりの方

が良いらしい。

「ノイのベット、どうしよう?」

「今のベットじゃ、ちよつと丈が高すぎるわね。」

ノイは、幼児期を過ぎてから、ふたりのベットの横に置いた、サークル付きのベビーベットを使っている。それは六十センチ位の高さなのだが、平素は身軽にひよいと飛び乗ったり、飛び降りたりを気軽にやっている。しかし、お腹が大きくなったノイ子を想像すると、ベットへの乗り降りが大変そうである。お腹をぶつけて、流産なんてことになっては大変である。早速、とり片付けることにする。ベビーベットの分解作業を、側でじつとみつめているノイの目は、明らかに「わたしのベット・・・」という顔である。マットレスだけ外して、涼しい風の通る窓側に置いてやる、これでやつと納得。

階段の登り降りも、できるだけゆつくりさせるように注意しなければならない。

胎教を考えて、なるべく叱らないですむように、ノイが叱られる状況にならないように、細心の注意を払う。

次は、産室の準備である。お産をする場所は、安全で落ち着ける場所であればならない。ということになると、ノイにとっては、ずっと夜を過ごしてきた、ふたりの寝室が、最適の場所であろう。ベツトルームの一隅を、ノイの産室に充てることにする。ノイは、日頃から、あ

まり暗い物陰や、机の下といった場所は好まない。が、お産に際しては、あまりあけつびろげで明るいのも、具合が悪いであろう。生まれたチビどもは、所定めず這い回るから、仔犬たちの行動を制約するための、サークルも必要である。厚手のビニールシートを買ってきて絨毯の上に敷き、二十センチ幅の板で、一畳強の囲いを作り、一部に柱を立てて、遮光カーテンでアラビヤの王様風に天幕を張る、中に入つて見ると、ハックルベリーフィンの隠れ家みたいで、意外と居心地が良い。どうやら、ノイも気に入った様子でクンクンやっている。サークルの接する壁面には、汚れが付着しないように、広く透明なビニールシートを買ってきて張り巡らす。これで何とかなりそうである。後は月満ちて、チビどものご誕生を待つばかりである。

妊娠婦

犬の妊娠期間は、一般に六十二・三日。従つて、ノイの出産は、八月十四・五日になるはずである。

一ヶ月が過ぎた。お腹の大きさも目立ち始めたが、ノイの日常に変化はない。梅雨が終わり、日増しに暑さが厳しくなる、強い日差しを避けて、日がおちてからの散歩がすがすがしい。あまり急激な運動は、そろそろさせない方がよいのだろうが、草原へくると大好きなボール投げをせがむし、河原へ連れて行けば泳ぎたがる、こちらが驚くほどタフである。しかし、一ヶ月

半が過ぎた頃からは、さすがに、地上を歩くよりは、水中で重力を制御した方が楽らしく、泳いでいるときの顔は、妊娠前に戻った身の軽さを楽しんで居るようであった。とにもかくにも、お腹の中の子供たちは、無事、順調に成長しているようである。

八月になった。大きなお腹はますます大きくなり、乳房もふっくらと柔らかかな丸みを見せて盛りあがっている。

毎日暑い日が続く。ノイの食欲は旺盛だが、さすがにたいぎそうで、クーラーのきいた屋内に居ても、もともとたれ目のアカンペーを、より垂れ下げて「わたし、一体どうなっちゃったの？」とでも言いたそうな顔つきである。彼女は初産だし、妊娠した仲間に出会ったこともない。自分の身体的変化が、マックと恋をした結果であることに、この時はまだ思い至っていないかったようである。この時はというのは、後に、再びマック氏とバーベキューパーティーで出会う機会があり、シーズン中でも、実際の行為をいたしたわけでもないのだが、マック氏に執ように迫られた後で、どうやら想像妊娠をしたらしく、きれいにひっこんでいた乳房を、再び膨らませてしまったことがあったからである。

ラブドールは、演技犬である。くらしくするのは大のお得意。

「ノイちゃん大丈夫？」

「産まれそうになったら教えるんだぞ、頑張れよ！」

などと声を掛けると、

「わたしもう駄目！ もう産まれちゃう！」

と言った顔をする。息使いまで荒くなる。

八月も十日になった。予定日にはまだ四・五日あるが、朝からなんとなく様子が落ち着かない。経験豊富な繁殖者に聞いたところによれば、いよいよお産の日には、朝からなんにも食べなくなるといふことだけれど、ノイ子は今朝もしっかり朝ご飯を平らげた。また、産室の床をガリガリ掻く動作を頻繁に行うともいうけれど、部屋の隅の絨毯に一カ所その形跡があっただけである。しかし、例の垂れ目は一層はなはだしくなり、鼓腹をひくひく動かしている様は、まさに風雲急を告げているように見えた。予定日というのは、決定日ではないから予定日なのだ。早産ということもあり得るではないか。慌てて潮時を調べ、急いで獣医さんに電話を入れる。なにしろ初めてのことなので、産まれる時に獣医さんに立ち会ってくださるよう、前々からお願いはしてあった。人間の赤ちゃんは、潮の満ちてくる時間に産まれるという、犬の場合にもこれがあてはまるのかどうかはわからないけれど、潮が満ちて来るのにはまだ時間がある。頼りの獣医さんが到着するまで、なんとかもちこたえそうである。

「もうちよつと我慢しろよ！ 予定日はまだ四・五日先だぞ。」

と言ったのが、いけなかったのかどうか知らないけれど、忙しい中を駆けつけてくれた獣医さ

んご夫妻に、尻尾を揺らしてご挨拶はしたものの、肝心の産気の方は一向に進行しないようである。お産は、夜中になることも多いということなので、獣医さんご夫妻には泊まっていたらくことにして、人間の方は、とりあえず一杯やりながら気長に待つことにした。ところが、ノイの方は、大好きな獣医さんご夫妻の顔を見て安心したのか、すやすやおやすみである。どうやら、今夜のお産はなさそうだ。

十一日。のんびり起きて、高校野球を見ながら一日待つが、産気至らず食欲旺盛、ガリガリ床を引っ掻く動作は時々示す。取りあえず、仔犬たちに産湯を使わせるための、タライを買いに行く。人間の赤ちゃん用のを買って来て、皆に笑われる。高校野球の関東勢、快調。獣医さんご夫妻、外出の予定をあきらめて逗留。

十二日。日航機事故のニュース番組と高校野球を、日なが一日見て暮らす。ノイの方は、「今にも生まれそう!」という顔をしながらも、食欲旺盛。獣医さんご夫妻、その顔にほだされ、予定変更して逗留。

十三日。引続き日航機事故のニュース番組と高校野球で、一日暮れる。獣医さんご夫妻、お盆休みの旅行計画を、やむをえず変更させられて逗留。ノイ子、相変わらず床を引っ掻きながらも、食欲旺盛。なにかあっては大変と、ここどころ散歩に連れ出していなかったのだが、毎日フウフウ言っているノイ子にも、気分転換が必要ではと、夕食後、

「まだなら散歩にでも行くか？」

と、試みに聞いてみると、大きなお腹をえんやらやと持ち上げて立ち上がったので、一同打ち揃って、酔い覚ましを兼ね、夜の公園に出かける。夜風が心地よい。考えてみれば、獣医さんを引き連れての、ぜいたくな散歩ではある。

出産

十四日。ノイ子、朝から相変わらず、食欲旺盛。最初のデートで妊娠していれば、今日が六十二日目、出産予定日である。しかし、様子は昨日と変わらない。

「ノイちゃん今日も産まれそうにないから、僕ちよつと仕事に行つてこようかな。」
獣医さんが、そう言いながら白衣をはおり始めた途端に、皆んなの動きを目で追っていたノイが、急に産気づいた。

「ああ、やつと産む気になったようですね。」

それとばかりに準備にかかる。さすがに、獣医さんご夫妻は手際がいい。へその緒を縛るための木綿糸を、十五センチくらいに切りそろえて消毒する。鉗・注射器その他の医療器具や薬品類が、たちどころに準備される。

産まれた仔犬たちは、母親のお腹の辺りに潜り込みたがるが、次の仔が産まれそうになった

ら、母親から離してやらないと押し潰される危険がある。一時避難させて置くための箱を用意して、中にタオルを敷く。

産湯用のお湯を沸かし、タライとタオルを揃える。お産は出血を伴うので、敷替え用のシーツ類を積み上げる。

回りの動きを、ノイ子は、不安そうな眼差しで追っている。切ない顔である。

「あ！ 産まれた！」

感激の瞬間である。それは、なにやら赤黒い粘膜に包まれた物体の出現であった。

「なんだか得体の知れないものが出てきて、わたし困っちゃった！」

といった顔で、ご当人は目をそらしている。人間が手を貸してやらなければ、少なくとも最初の子は、明らかにそのまま死んでしまったことだろう。

仔犬を取り上げてやると、母親は胞衣を食べようとすが、これはとても栄養価が高く、食べ過ぎると逆に良くないらしい、産まれる子全部のものを食べさせてしまわない方が良いようだ。

獣医さんは、手早くへその緒を三センチ位の所で縛り、カットし、切口に白い血止めの粉薬を付け、鼻腔を塞いでいる腹水を排出させるために、両掌で仔犬をそっと包み込むように持つて、仔犬の頭を外に向け、二・三度大きく弧を描くように振ってやる。ぐったりしていた風

な仔犬が、生気を見せ始める。お湯で身体を洗ってやると、元気に手足を動かし始めた。タオルで丁寧に水気を拭き取って、体重を量る。四三〇グラム。肢体健在、ちっちゃな耳と、可愛い尻尾が付いている。鼻先に顔を近付けると、仔犬独特の甘い香りがする。ふわふわの、真っ黒な産毛が密生した、男の子である。母親のもとに帰してやると、もこもこ這って行って、鼻先でお乳をまさぐる様子は、なんともけなげで愛らしい。午前十一時五十五分、第一子無事誕生である。

ぼんぼんぼんと、次ぎから次ぎに、何匹かの仔犬が、産まれるのかと思っていたが、どうやら、そうしたものでないらしい。次ぎが産まれるまでの間に、汚れた産湯を捨て、シーツを取り替える。

第二子の誕生は、午後一時二十三分。ずいぶん時間がかかったのは、産道で苦労したせいか、ぐったりして元気がない、カンフル注射の助けをかりて、生気を得る。五〇〇グラム。肢体健全。同じく真っ黒な、男の子であった。

三番目の子は、一時四十三分。この子は元気だ。三九〇グラム。同じくブラックだが、今度は女の子だ。

四番目は、二時十分。間隔がだんだん短くなった。四〇〇グラム。引き続きブラックの、女の子。

仔犬たちの箱の中が、次第に賑やかになってきた。まだまだ脚は立たないが、前脚と後脚を上手に使って這い回る。皆んな元気だ。

五番目は、三時五分。もうそろそろクリーム色の子が、との期待がはしる。しかし、この子も真つ黒な、男の子だ。四〇〇グラム。

六番目、三時十五分。四〇〇グラムの、女の子。ブラック。

七番目、三時五十二分。四〇〇グラムの、男の子。色は黒である。

八番目、四時十五分。四五〇グラム。女の子。やはりブラック。

九番目、五時四十六分。四二〇グラムの、女の子。ブラック。

十番目、六時十三分。三八〇グラムの、女の子。同じくブラック。

パンパンだったノイのお腹が、ぐっとスマートになった。それにしても、十頭とは大した数である。よくやった。最初は、当惑げな眼差しで眺めていたノイも、一心に乳房に吸いつく仔犬たちに、母性本能を呼び覚まされたのか、次第に、優しく慈しむ眼差しを示し始める。

母体も、子供たちも、無事である。次ぎの子こそはと、待ち続けたクリーム色の赤ちゃんは、遂に産まれなかったが、ぶち毛も肢体に傷害の見える子もなく、全員、健康なチビども誕生に、祝杯を上げる。

育児

仔犬たちと過ごす最初の夜、母親ノイ子は、さすがに長時間のお産に疲れたのであるう、ぐっすりと寝入っている。ふたりを信頼し切っているのか、子供たちを守るうとして寝ずの番などという気配はまるでない。時々目覚めては、「なんだか知らないけどたくさんいるねえ!」とでもいった顔で、仔犬たちをひとわり見回すと、また寝込んでしまう。仔犬たちは、母親にすがりつくように身を寄せている。ノイの体重は、三十五キロを下らない。四・五〇〇グラムのチビどもの上に、寝返りを打たれたら、かわいそうなパンダの赤ちゃんの二の舞である。

ふたりは、緊張気味に監視する。より寝心地のよさそうな場所を求めて、もこもこ動き回るチビどもは、いつまで見ても見飽きない。中には、壁面とノイ母さんの背中、わずかな隙間に潜り込もうとする奴もいる。初産の後の第一夜だけは、どうしても飼主の注意と手助けが必要なようだ。

無事、朝を迎える。潰れた奴は居なかった!

ノイは一晚の熟睡で、疲労を快復させたようで、食欲も旺盛である。母犬用のサイエンスと馬肉の定食をペろりと平らげ、犬用の粉ミルクと市販の牛乳を混ぜたものをおいしそうにたっぷり飲んだ。仔犬たちも皆、極めて元気に母親の乳房にしがみ付いている。器用に小さな二本の前足を交互に動かして、乳房を押し出す姿も可愛い。母乳の出もすこぶる良いようだ。

ノイは、群がり寄るチビどもに対して、次第に母親らしい仕草を示し始めた。体の向きを交える時にも、チビどもを跨いで歩く時にも身のこなしは極めて注意深くけなげである。自分が小用に行きたい時にも、チビどもが一段落して乳房から離れるのを待っている。

どうやら一安心である。母親の具合いさえ良ければ、チビどもは母乳だけで育てた方が良い。母体にあるさまざまな免疫抗体が、母乳を通して仔犬たちにも培われるからである。

犬の乳房の数は、いくつと決っていないようである。八個の子も居れば十個の子もいる。中には奇数の子も居るのにはびっくりしたが、別に奇形というわけではない。ノイ子の乳房は八つしかない、それは胸先から下腹部にかけて左右対照に並んでいるのだから、下腹部に近いものほど膨らみも大きく、乳の出も良いようだ。当然、チビどもの中でも要領の良い奴は、他を押し退けてその乳房に武者ぶり付いている。チビは十匹で乳房は八つだから、一斉にお乳を飲もうとすれば、必然的に二匹があぶれることになる。人間の世界でも同じだけれど、集団の中には必ず遠慮深いのかおっとりしているのか、見ていると敏捷性に欠けるわけではなさそうなのに、いつも決ってあぶれる子が居るものである。乳は溜った分が飲み尽くされると、次が溜るまでに少し時間を要するから、満腹した子が譲ってくれた乳房ばかりにしかあり付けない子は、気を付けてやらないと成長に遅れがでてる。都合の悪いことに、チビどもの行動にもなにかサイクル化した一定のパターンがあるようで、お腹がすくのも、眠くなるのも、排泄

するのも、皆んな仲良く一緒である。しかして、あぶれの常連さんには、多少の依怙ひいきをすることに。

チビどもも、一人前におしっこはするし、うんちもする。最初は、母親にあそこをちよいと嘗められて、やっと出ましたって顔でちよろつとだつた癖に、慣れてくると、フンフン言いながら、頼もしくも堂々とやり始める、チビのことだから、量的には可愛らしいものだけれど、なにせ数が多いから大変である。母乳だけの頃の排泄物は、なぜか全然といていいほど臭くない。そのせいかどうかは知らないけれど、清潔好きなノイは、ふたりが目を離していると、自分で始末をしてしまう。獣医さんに依れば、食べてしまつても、とりたてて害はないそうだけれど、人間の目から見ると、あまり感じがよくないから、チビどもがその気配を示したら、取り合ひである。汚れたシーツを替えたり、お乳を飲みそびれている奴が居ないか注意してやつたりの、手数は掛かるが、仔犬たちが、母乳だけでお腹を満たしてくれている間は楽である。

仔犬たちの成長は驚くほど目ざましい。二日おきに体重を量つた。

四〇〇グラムで産まれた子が、三日目には四六五グラム。五日目・五五五グラム。七日目・六七〇グラム。九日目・七四〇グラム。十一日目・八五〇グラム。十三日目・九六〇グラム。十五日目・一〇八〇グラム。十七日目・一三三〇グラム。十九日目・一三九〇グラム。二十一日目・一四六五グラム。二十三日目・一五四〇グラム。二十五日目・一六五〇グラム。二十七

日目には一八四〇グラムに成っていた。

脚が立ち、ぱつちりと澄んだ目を開いたのは、十三日目。チビ同志がじゃれて、相撲など取り始めるのが、十九日目。われわれふたりの顔を見て、初めて感情をこめて尻尾を振ってくれたのは、二十一日目。真っ白の歯が見えてきたのは、二十三日目であった。そろそろ離乳の時期である。可愛らしく小さな小さな歯なのだけれど、これは、チビどもの凶器でもある。最初の頃はいいのだが、次第に顎も力強くなってくる。乳房を吸われる母親の方はたまらない。がつついた子に取り付かれると、乳房はたちまち血だらけという悲惨な状態になってしまう。離乳を急がなければならない。

四週目になった。念のため、獣医さんにおいて願って、パルボ腸炎の予防注射をもらう。母体から受け継いだ免疫がこの頃になると次々に切れはじめる。生後二か月ほどの間は、訪れる人々や動物たちなど、外部との接触は禁物だが、目にみえた接触はなくても、悪い菌類がどういう経路で進入してこないとも限らない。聞いた話だが、菌を持った犬に通りすがりに着ていた衣類を、ちよつと鼻先で触られたばかりに、大切な愛犬を死なせてしまった人もいるそうである。ノイは、結婚が決まったときに、諸々のワクチン注射をもらったから、その抗体は仔犬たちに間違いなく伝えられているはずである。生後四週目の予防接種は無駄になるかもしれないが、注射の副作用が危険なものでないならば、できる限りの予防策を仔犬たちに

講じておくに越したことはない。

四十日を過ぎたら、五種とか七種とかのワクチンを混合した、予防接種を始めなければならない。

獣医さんの言によれば、ワクチン注射の仕方にも、念入りなものと、そうでないものがあるそうである。鰻や寿司のランクじゃないけれど、特上・松・竹・梅みたいになっている。ちなみに、

特上は、六・八・十・十四・十八・二十四週目に行く、六回コース。

松は、六・八・十・十四・十八週目に行く、五回コース。

竹は、八・十・十四・十八週目に行く、四回コース。

梅の上は、十・十四・十八週目に行く、三回コース。

梅の並は、十二・十八週目の、二回だけ。

だそうである。

注射の回数は、当然、料金に関わってくるから、いい加減な繁殖者は、なるべく少なくすませようとする。免疫のことだから、無駄になることはあるかもしれないが、ふたりの鰻は梅の並で我慢しても、可愛いチビどものためには、出費を惜しんではいられない。回数が多いからといって、チビどもは別に痛がることもない。

お食いぞめ

獣医さんに相談して、離乳食の献立表を作る。

最初の五日間は、少量のチヨビワンフレークに犬用の粉ミルクをぬるま湯で溶いて加え、粥状にしたもの。これを一日に五回。

次の三日間は、それに、デビフの黒缶を、一匹につき茶匙一杯あて加える。回数は同じで五回。

その後は、それに、サイエンスのグロース（幼犬用）を、一匹あたり三粒あて、溶いたミルクで良くふやかして柔らかくした物を加える。排泄物の形状に注意しながら様子を見て、具合がよければ、グロースの量を徐々に増やし、チヨビワンフレークの量を減らしてゆく。

グロースに慣れてきたら、回数を減らして、四回にしても良い。水は適当に飲むようであれば、自由に飲めるように置いてやる。しかし、お水好きなラブラドル、上半身から水の中に飛び込んでしまうから、小さな器だと、チビどもは群がってひっくり返してしまうので、水盤のように大きく浅い器が必要である。常時置いておけない場合は、時間を計って飲ませるようにする。

これがわが家の離乳食メニューであった。余計なカルシウム剤や肝油などは、一切与えない。メーカーの宣伝をするわけではないが、チヨビワンフレークなる物は完全栄養なのだそう

だ。試みに摘んでみると、ウエハースそっくりの味がしてなかなか旨い。初めて固形物を口にするチビどもが、競ってよく食べるはずである。これは確かに高価で、他のメニューに較べれば割り高につくようだが、仔犬たちの具合が悪くなつて、お医者さんにかかることを考えれば、食べ物が一番良いと思われる物を食べさせておいた方が、かえつて安上がりである。ただし、このチョコビワンフレークなる物、どこのペットショップにでも置いてあるというわけではないのが苦勞の種であつた。出入りのフード屋さんに聞くと、「うちでは扱っていませんので、十二箱のセットをダースの単位でご注文をいただけるならお入れできますが」なんて言う。冗談じゃない、目算ではその半分で充分だ。一時期だけしか食べない物を、そんなに大量に仕入れたつて、高カロリーだから、後日おやつに与えるわけにもいかないのだ。今から考えれば笑い話だが、山のカラスじゃないけれど、家に十匹の子が待つ身の間は、たちまち数箱を消費するから大変であつた。勤めの帰りになんとか数箱を手に入れて帰らないと、子が飢える。かくて、あちらこちらの扱つていそうな店に、電話を掛けて問い合わせることになる。あるデパートに掛けたときのこと、

「もしもし、ペット売場お願いします。」

「はい、かしこまりました。」

「あのう、おたくにはチョコビワンフレーク置いてありますでしょうか？」

「は？ チョロワンフレール、少々お待ち下さい。．．．．あのう、お電話変わりました。そのワンフレールってどんな形 の物でしょうか？」

「形って．．薄くって、ふわふわしてて、お煎餅位の大きさで、 フレークだから形はフレーク状だけど。」

「．．．？ あのう．．．何にお使いになれる物でしょうか？」

「何に使うって、仔犬の離乳に使うだけど。」

「あ、失礼致しました。こちらペット売場でございます。ペット売場の方にすぐお電話お返し致しますから．．．。」

あまり売れる物ではないらしく、たいていは一・二箱しか置いていないから、離乳の期間が終わるまで、何度かこんな苦勞を繰り返させられた。

チビどもは、グロースにすぐに慣れ、三十日目頃になると、ミルクでふやかしたりしない方が、歯ごたえがあつて楽しいのか、ペースト状に濃く溶いた犬用粉ミルクをまぶしてやると、喜んで良く食べるようになる。そうなればもう、チョコビワンフレークもデビフの黒缶も、本当に味付けの調味料的役割となり、一応離乳は成功である。

対応次第

家の中でお産をさせて大変なことの一つは、仔犬たちの便の始末をどうするかということである。固形物を食べ始めると、排泄物もそれなりに悪臭を放ち始めるが、ラブラドルは、こんなチビでも清潔好きなのか、「一隅に新聞紙を敷いてやると、必ずそこで用を足す」と教えてくれた先輩の言に従ってみると、まか不思議、誰が教えたわけでもないのに、全員が公衆便所の空くのを待つかのごとき顔付きで、順番待ち。こちらが前の奴の始末をして、新しい紙を敷くのもどかしいといった様子で飛び乗って来るのには驚かされた。先輩の言や聞くべしである。これで排泄物の片付けは、とても楽になった。

大量の新聞紙をサークルの横に積み、汚れたら大型のごみ袋にどんどん入れる。かくて、わが家のごみ捨て日は、大きなごみ袋をいくつもさげて捨場へ往復という日常が続いた。

その間に、チビどもはどんどん大きく成り、手足も遅く成って、サークルを外すと家中を集団で駆け回って大運動会になる。もちろん、最初に用意した高さ十五センチ程度の板囲いなんかでは、ものの役には立たなくなる。人間が跨いで出入りできる程度の高さにとどめておきたいのだが、チビどもは脱出の天才だから、囲いは三十センチ、五十センチと、だんだん高くなるらざるを得ない。それに伴って、居住区域も広げてやる必要がある。わが家の寝室は、次第に侵食されるという結果になった。が、意外なことに、いたずら大好きなチビどもが、今やサークルの中に取り込まれてしまって、使いものにならなくなることを見悟した家具を噛むことも、

自由に家の中を駆け回らせても与えた物以外には目もくれなかったのには、感激であった。

お産をする場所を、四六時中、われわれの顔が見られる場所にして、一番良かったと思うのは、チビどもが、驚嘆すべき早さでふたりの言葉を理解し、順応するようになったことである。

ノイがわが家にやって来た頃、誰よりも慕っていた女房殿が台所に入ると、自分もどうしてもしそこへ入りたがった。台所には、危険物もいっぱいある。ノイの侵入を阻止しようと、台所の入口を塞いで立てた炬燵板に、それは、ノイの体の何倍もの高さで、どう考えてもノイが飛び越えられる高さではないのだが、懲りることなく何度も何度も、どすんどすと飛びついては、滑り落ちるのであった。その根性には感心させられたが、いくら口で言っても止めようとならないのには、閉口させられた。ノイと言葉で意志の疎通がはかれるようになるまでには、相当の時間を要したものである。

それが、生まれた瞬間から家族と一緒に過ごしたノイのチビどもは、「入っちゃ駄目！」の一言で、なんの仕切りもない台所の前で、どの子もびたりと止まるのである。小さな尻尾をゆらゆらさせながら、そこに団子のように群がって、「このくらいならいいでしょう」とでも言いたげな顔つきで、時々前足でちよつとだけ台所の床に触ってみたりしている様子は、なんともほほ笑ましいものである。

仔犬を育てるのには、「相手は犬なんだからわかるわけないや」といった、人間特有の傲慢

さを捨ててぶつかってみることである。ラブラドルの場合には、びっくりするような反応が帰ってくることも、請け合いである。

なにやかにやで、その夏の休みは、何処かへ遊びに出ることもならず、お産と子育てに明け暮れてしまったけれど、おかげでチビどもは、全員無事。さほど大小の差もなく平均した体格で、お腹を壊す子もなく、健康に育ってくれた満足感是他に代え難かったし、犬たちにいるんなことを教えられた一夏でもあった。

後は、これからこの仔たちを可愛がってくれるはずの、新しいお家に引き取られて行く前に混合ワクチンの注射をして、それぞれの旅立ちを見送る悲しみに耐えるだけである。

（会報「オッターテイル」VOL.4）